

風雲の中東地域

①

小村 幸二郎

まえがき

「サウジアラビア紀行」が本誌 No. 136～138 に掲載された頃 筆者は ヨルダンとの国境に近いサウジアラビア北辺の地 ヘジャース山脈の内ふところの一角で キャンプ生活を送っていた。通信・連絡も思うにまかせない辺境の地で調査業務に従事していたこともあって心ならずも「サウジアラビア紀行」の掲載を一時中断せざるを得なくなった。延べ3年間にわたるサウジアラビアにおける鉱物資源調査業務を終って帰国した今再び現地事情を紹介するためペンを握ることになったが諸般の事情と文才に乏しい筆者の記事がどの程度読者にとって役立つかはなほ疑問である。1967年5月18日夕刻 金波をちらすスエズ湾には静かに落陽を送る20隻余りの船舶の平和な姿があり 焼けただれたようなシナイ半島の峻険にも 砂漠にも 風雲を告げる何物もみられなかった。しかし……

放浪の民の祖国復帰

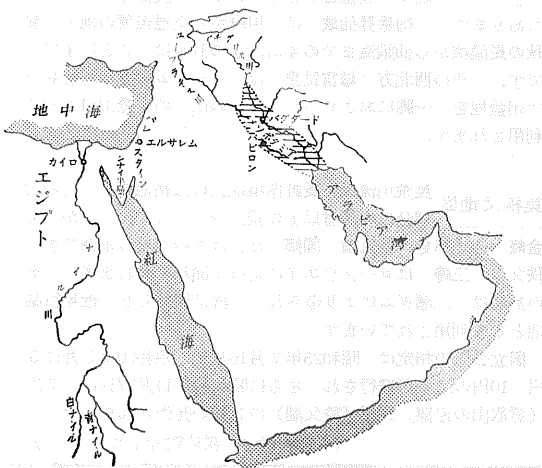
1945年 世界を恐怖の底に陥入れた第2次世界大戦も終結し 破壊の中で死におびえながら 戦に疲れ果てた世の多くの人々にはようやくしあわせの光が訪ずれようとしていた。長かった戦争の終結 最愛の夫・子供そして父たちは 生きる喜びをかみしめながら それぞれの母国へ帰って行った。家族との再会 そして明日への希望 たとえ一時の恐怖・愁えがあつたとしても 各人各様の喜びがこの時ほど世界の隅々までわき上ったこ

とが過去にあったらうか。そしてこの戦の終結は放浪の民ユダヤ人に 祖先の地への復帰をもたらし 2000年を経て世の人々と等しく生きる喜びを与えた。しかし 世の多くの人々がようやく安らぎをおぼえる頃 父祖伝来の地パレスチナに生きる喜びを分かちあっていたユダヤ人の頭上には 又しても 試練の槌がふりおろされたのである。パレスチナ戦争の勃発 それは ようやく祖先の地に帰り得たユダヤ人にとっては 再び放浪の民と化すか または 独立国としての輝やかな栄誉を得るかの二者択一を迫った大試練であった。

チグリス・ユーフラテスの2大河がうるほす豊饒の地メソポタミアの草原に 家畜を飼い 平和な暮らしを営んでいたユダヤ人は その後 パレスチナへ移住し その一部はさらに西方のエジプトの土を踏んだ。(第1図)

しかしエジプトの地はユダヤ人にとっては安住の地ではありえなかった。そして 平和な暮らしへの希望の灯は 時のエジプト王の圧政と弾圧の下に 時を経るにつれてその光を失い 遂に モーゼに率いられて 彼等はエジプトの地を脱れなければならなかった。紀元前1450年のことである。紅海のなぎさを渡りシナイ半島の山々をそして砂漠をさまよいながら40年の後 彼等は神によって約束された聖なるカナン(パレスチナ)の地にたどりつき かつて行を共にした同胞との生活に入った。放浪の旅 ペリシテ人との抗争等 苦難の道をたどらなければならなかったユダヤ人は これを期に 再び放浪の民と化すことをおそれ ようやく帰り得た祖先の地に自分の国を築くことを誓った。そして彼等はモーゼの死後 その後継者となったヨシュアの下に12支族を結集し 砂漠の神ヤハベに忠誠を誓って団結を固め 紀元前11世紀 遂に ダビデ王を支配者とする大連合王国を建設した。この王国はダビデ王の子ソロモン王の時代まで大いに栄え 人々は世にいう「ソロモンの栄華」に酔いしれたのである。しかしその栄華も 外敵につけ入る隙を与えなかった傑出した指導者ダビデ王・ソロモン王の卓抜な統率の下にあってこそ安泰であったわけでソロモン王の死後はかなく消え果てた。

誓を共にした12支族は これを期に 10支族の集団による北王国と2支族の集団による南王国とに分裂し 遂



第1図 中東地域概念図

には この世から抹殺されるに至った。 大国の権勢と栄華を羨望の目でみる隣国の人々 それが乱世であればあるほど 羨望はねたみへ ねたみはさらに権勢倒崩の策略へと変ってゆく。 そしてこの大王国の分裂を待ちかまえていたかのように 北王国と南王国への隣国の侵攻が開始された。 まず北王国がアッシリアによつて滅ぼされ その生き残った人々は ドレイとして連れ去られたが その後どのような運命をたどってどこへ去って行ったのか いまだに明らかにされていない。 これが有名な「ロースト・テン・トライブス (失なわれた10支族のナゾ)」である。 残された南王国も 北王国の滅亡後間もなく バビロンによって滅ぼされ その住民はバビロンに連れ去られたが 後に赦されてパレスチナの土を踏んだ。 しかし 彼等は やはり 暗い運命から脱れることができなかった。 ユダヤ教の一派の精神的指導者キリストがシオンの丘に薨れて後間もなく 当時の支配者ローマ帝国に反抗したユダヤ人は その都エルサレムを炎の中に失い 遂に 放浪の旅路をたどるなげきの民と化し 神によつて約束されたカナンの地を後にしたわけである。 紀元前70年 今もその名を世に残すエジプトの美妃クレオパトラの死に先んずること40年のことであった。

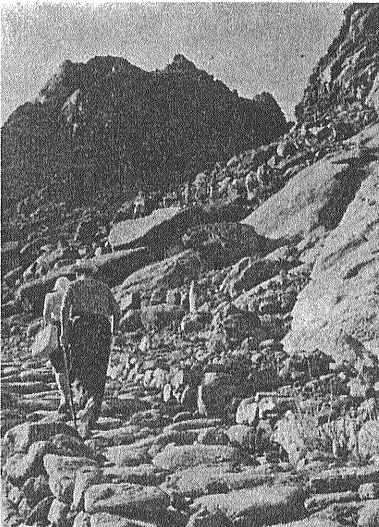
パレスチナ戦争

世界の爆裂火口といわれる中東地域の危機をはらんだ複雑な動きは 大きくみて アラブとイスラエルの対立とアラブ諸国のそれぞれの立場による政策の不一致に基因する問題の発生によって特徴づけられているとみなされよう。

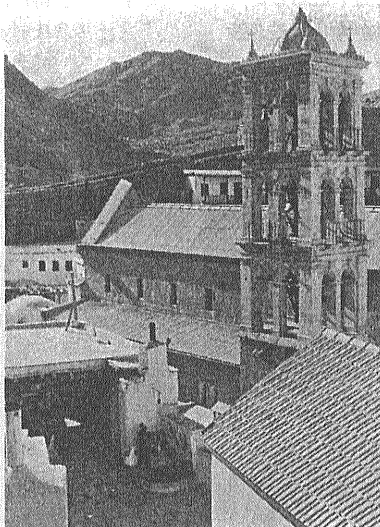
アラブとイスラエルとの対決は 近世に起こったもの

ではなく その歴史をひもとけば ユダヤ人がパレスチナを追われた時にさかのぼる。 放浪の民ユダヤ人の祖先の地に馳する望郷の念は一入強く それはやがて祖国復活の道を拓くシオニズムの発生と運動の展開へと進んでいった。 パレスチナの土地が3000年来のユダヤ人の故郷であることは疑の余地なく史実が証明する。 しかしまた この土地が アラブにとっても およそ1500年来の宗教上の聖地であることも事実である(第3図)。 そしてこのことがアラブとイスラエルとの対立の根本的要因となった。 1930年代に入ると アラブは パレスチナ復帰の道を固めつつあつたユダヤ人追放のスローガンの下に テロ行為を繰り返し ユダヤ人も それに対抗してテロ行為を行なうに至り 両者の間は 日を増すにつれて より複雑かつ儉悪な状態へおちいつていったのであるが ユダヤ人に 一層の団結を固めさせ 建国の道を短かめさせたのは当時のイギリスのこの地域に対する政策にあつたともみられる。

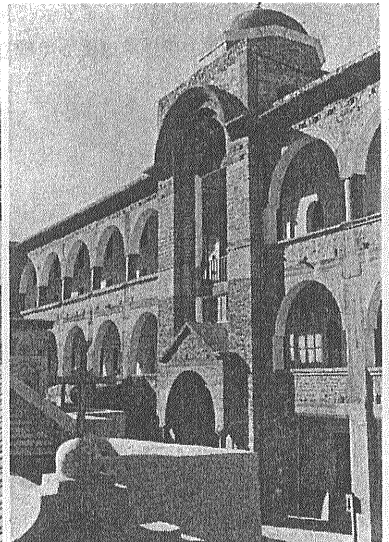
アラブの度重なるテロ行為に対して厳然たる態度でのぞみ得なかつたイギリスの統治機関に対する建国の意気に燃ゆるユダヤ人の怒りは 遂に パレスチナ問題を国連の討議にかけることをイギリスに提唱させ その結果国連がユダヤ人に独立国を与えることになったからである。 そして1947年5月 祖先の地パレスチナに人口約65万のイスラエルという独立国が誕生した。 しかし ユダヤ人追放をスローガンとするアラブは パレスチナに在住するアラブ保護の名の下に イスラエルに対するテロ行為を激化し 世の平和がようやくよみがえろうとしていた1948年 ついて両者の対決パレスチナ戦争が勃発した。 その結果はどうであったか。 武器さえ乏し



第2図 a. モーゼが10戒を授かったといわれるムーサ(モーゼ)山



第2図 b. ムーサ山の頂上近くに住つた St. Catherin 教会



第2図 c. ムーサ山の頂上近くにある回教寺院

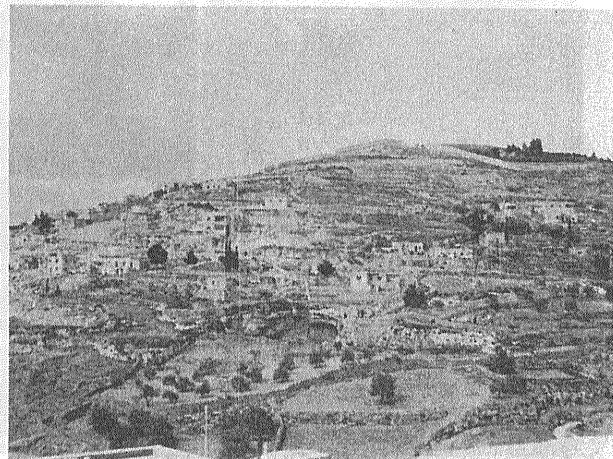
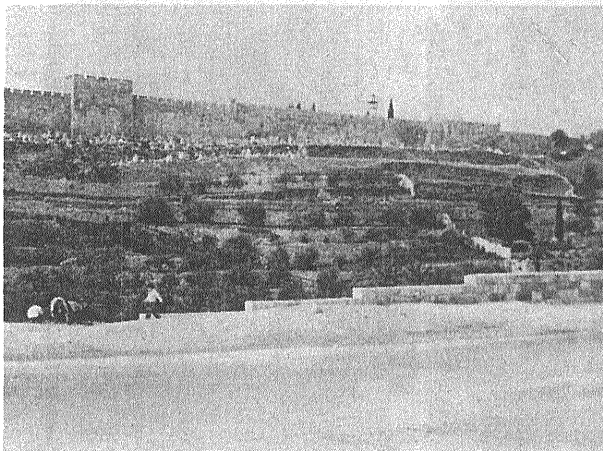
イスラエル軍の前にアラブの軍勢はもろくも崩れ去ったのである。そして1949年、国連の介入によって、両者の間に休戦条約が締結され、当時の最前線が休戦ラインとなり、アラブ軍は兵を退いた(第4図)。もしこの時国連の介入がなかったならば、アラブはより以上の打撃をうけ、敗者としてのきびしい現実を余議なくされたことだろう。アラウの神の御加護のおかげかどうかは知るよしもないが、国連の介入がアラブ側にとって、時の氏神のような役割りを果たしことは否定できない。休戦条約が締結されたとはいえ、アラブ諸国の中にはこの条約に調印しなかった国もあり、また、調印した国でさえもその多くはこれを一時的休戦としか理解しなかった。このことは、アラブとイスラエルとの対決が完全終結に至っていないことを意味し、再びアラブとイスラエルとの武力対決の場が多分に残されていることを示す。

エジプト王政の崩壊と革新政権の誕生

パレスチナ戦争休戦条約調印後およそ3年を経た1952年、貧困にあえぐ国民の忍従の上に、権力と金力の座に豪華な生活を送り、宮廷内の腐敗と相まって、国民の非難的的となっていたエジプト王ファルーク一世打倒の流血革命がムハンマド・ナギブの指揮によって行われ、文明発祥の母ナイルと共に生きたエジプトの王政はもろくも崩れ去った(第5図)。しかし厳密に言えばエジプト本来の王政が絶えてからこの時まで、すでに3447年の歳月が流れていた。エジプト最後のコアラオ王朝の統治が終ったのは、イスラエルの民がモーゼに率いられエジプトを脱出して後925年、紀元前525年のことであった。その後エジプトは、ギリシア、ローマ、アラブ、トルコによって征服されて、被征服者としての忍従を強いられ近世に入ってからはイギリスの権力下にあった。1922年エジプトはイギリスによって独立を宣言されたが

マケドニア(現在のユーゴスラビア・アルバニア地方)出身のムハンマド・アリが築いた王朝に属していたファルーク一世の統治下では、その独立宣言は、内容を伴わない、うわべだけのものにすぎなかった。そしてファルーク王は、英帝国陸海軍の厳重な監視の中にあって、統治者としての実力も権限もなく、いたずらに快楽をむさぼる墮落の淵に陥っていった。しかし、その陰には腐敗した宮廷と政治家達を一扫し、エジプト人の手によって統治されるべき輝やかなしいエジプト建設を誓う、たくましい人々の中に一人の青年将校の姿があった。

1918年1月15日に下級官吏の子として生れ、当時新進気鋭の少尉であったガマル・アブデル・ナセルである。ナセルがこの世に出る第一のきっかけとなったのは、子供の頃から夢みていた軍人になったことである。1936年、ナセルは陸軍士官学校への入学を試みたが、財産はなく、下級官吏の子にすぎなかった彼には、1935年の反英流血デモにおけるアクティブな活動による要注意人物としての警察の目もあって、果たされなかった。失望したナセルは、同年、法学部の学生となり、マルクス・レーニン、孫文等の書を読みふけた。この年イギリスとエジプトとの間にエジプト条約が締結され、エジプトは、英国の軍事占領と保護国制度の枠からのがれることを得たが、英軍基地の存続を規定したこの条約によって、完全な自治権を得るに至らなかった。このことは血気さかなナセルの激しい噴りをかっただが、運命の皮肉と、いか、この条約の締結によって、軍隊の増強を余儀なくされたエジプトは、1937年に陸士の募集を行なうことを決め、一時は軍人として生きる望を捨てたナセルは、友人のすすめで再び受験、晴れて軍人としての第一歩を踏みだすことを得た。この当時、ナセルはすでに人を威圧するに足る体躯の持主であつたらしく、陸士入学の実現



第3図 a. エルサレムの旧城壁 この城壁の中にキリスト処刑の場、十字架を背負って歩かされた石ダミの道、マーケットなどがある

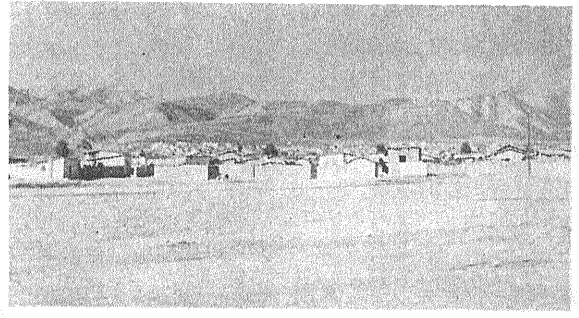
第3図 b. エルサレム風景 エルサレムからベツレヘム(キリスト生誕の地)へかけてなだらかな丘が続く この写真はその典型的な風景を示す

もその体躯に魅せられた試験委員長の推薦によったものといわれている。

1938年7月1日 ナセルは 同期生アブドル ハキム アメルらと共に陸軍少尉として陸士を巣立ち 部隊へ入った。 革命の意気に燃え 革命の本質を知りつくしていたナセルは 1939年1月15日 友人たちが開いてくれた誕生祝の席上「この会合が歴史的な会合となり この友情が永遠であることを誓おう」と呼びかけて 同席の友の同意を得た。 厳冬の夜のこの誓が有名な「マンカバードの協定」であり ここにエジプト革命の最初の芽が生じたわけである。

それから3年 第2次世界大戦の渦中であって アフリカ戦線ではロンメル元師麾下のドイツ機械化部隊とモンゴメリー元師麾下の英軍が血みどろの戦を繰り返して両者の戦はドイツ軍優勢の中に進展していった(第6図)。 当時イギリスの権勢下であって解放の日を待ちわびていたエジプトの大衆はドイツ機械化部隊のエジプト侵入を「解放者の来訪」として心待ちにしていた。 そしてその期待は ドイツ軍のリビアの首都奪取を機に 反英斗争のデモへと変っていった。 ロンメル將軍の破竹の進撃に呼応したエジプト国民の喜びに満ちあふれた反英斗争 勝利は目前であった。 しかし国民大衆の努力と期待もむなしく 「エジプト条約を必死に守り抜いた親英派のナハス・パシャを首相に任命するか または退位するか」の二者択一を迫ったイギリスの圧力に屈したファルーク王の王位に対する執着心によって解放の夢は破れた。

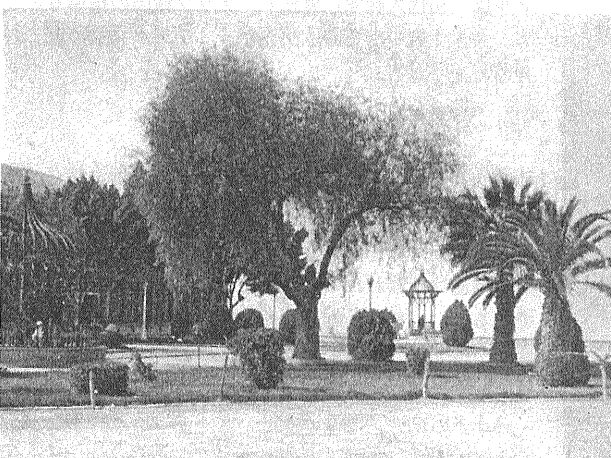
この期を利用して体制を立てなおしたモンゴメリー元師麾下の軍は 灼熱のリビア砂漠で ロンメル將軍麾下の部隊と天下分目の戦車戦を展開し ついに勝利を得た。 そしてエジプトでは 英軍の勝利を後楯としたナハス・



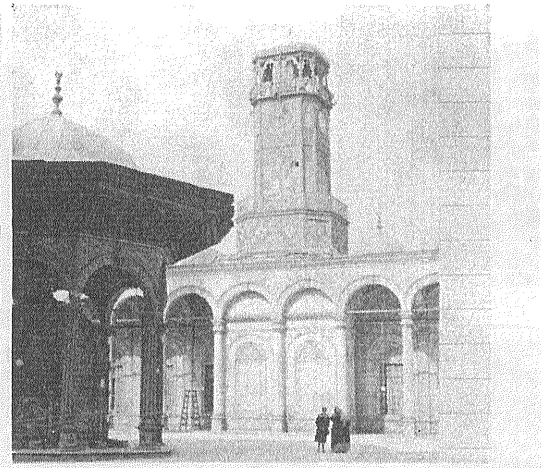
第4図 アラブ難民の部落 ジェリコ郊外

パシャの弾圧の手が国民の上へのび 言論による政府攻撃すら全く許されず 自由奪回を目的として団結したナセル派の自由将校団の言動もきびしく監視されるに至った。 特高組織による弾圧に終始したナハス・パシャは 2年8ヵ月後に権勢の座からおろされ その後任者としてアハマド・マヘルが指名された。 しかし 彼は 権勢の座を得て約8ヵ月後 敗戦は時間の問題とされていたドイツに宣戦布告して民族主義者の怒をかい その日の議会のただ中で暗殺される悲劇の運命をたどった。

第2次世界大戦を通じて中東諸国は大国の手にほんろうされつづけたわけであるが その渦中であって サウジ・アラビアは 膨大な石油利権料によって 近代国家建設の道を エジプトは自由将校団を中心に革新政権の樹立へそしてイスラエルは父祖の地に建国への道を歩きつづけた。 1948年5月15日にイスラエルは独立を宣言し エジプト首相は 翌16日 エジプト軍にイスラエル侵入を命じここにパレスチナ戦争が勃発した。 エジプト首相は この作戦が勝利の中に短日日で終ると楽観しファルーク王は自己の権力の座をおびやかす自由将校団の消滅を予期したが この戦の結果は 首相の思惑とはうらはらにエジプトの惨敗に終り 自由将校団の団結を



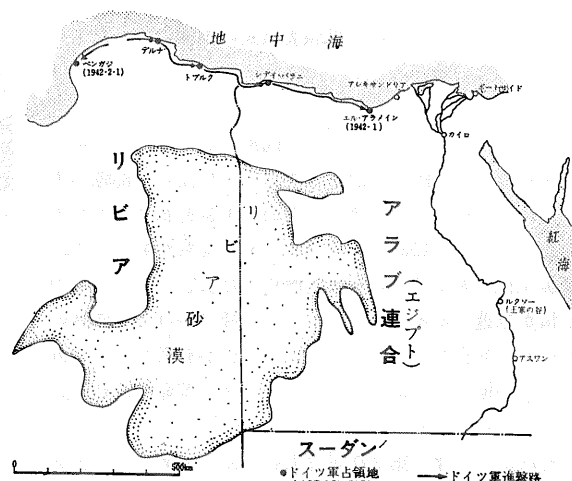
第5図 a. モハメッドアリの邸宅と庭



第5図 b. アラバスターで造られているモハメッドアリモスク (回教寺院) の中庭

いっそう固めさせることになった。この戦にナセルが参加させられたことはいうまでもない。そしてナセルはこの戦を通じて エジプト軍の軍備の乏しさを知りファルーク王の下にはびこる陰謀と悦楽の維持のための犠牲者と化しつつあった自己を見出し 革命への情熱をさらにかきたてられた。

パレスチナ戦争終結の翌日から エジプトは 次第に革命前夜の情勢に入り 高官の暗殺 ファルーク王をはじめとする王宮と政府の対立 そして革命を決定づける端緒は 奇しくも ファルーク王によって与えられた。孤立からの脱脚を計ったファルーク王は かつて人民の非難を一身に浴びたナハス・パシャを再び登用したが ナハス・パシャの政策はエジプトを経済危機に陥入れることになった。自分が播いた種は自分で刈り取るのは人の世のならわしであるが しかし その刈り取り方によっては その種は決して死に絶えはしない。ナハス・パシャは 自己の播いた経済政策が不首尾に終るとそのうめ合せを国民の精神的満足に訴えようと計り かつてはイギリスの権勢を後楯として悪政の上に弾圧をもって人民に対したことをおくびにも出さず 特別議會を招集して 一方的に エジプト条約の破棄を宣言した。これを機にイギリスとエジプトのはげしい対立が起こりエジプト人ゲリラによるイギリス軍に対するテロ行為が続発した。イギリス軍とエジプト軍との戦 エジプト人による暴動は日増しにはげしさを加え 1952年1月26日暴動の一大饗宴として知られる「黒い土曜日」を頂点として 次第に群衆の力はイギリス側に勝っていった。しかしこの暴動のホコ先が イギリス人 金持の娯楽設備およびイギリス系の建物に集中されたことは この暴動がいかによく統率されたか そしてその目的が何であったかを示すものとして注目される。



第6図 第2次世界大戦アフリカ戦線概念図

この暴動の発生によって 自由将校団を中心として計画されていた革命の日は早くなり 1952年7月22日 軍隊の指揮権を完全に掌握して文官の権力を制圧し ファルーク王の退位を実現して 人民のための政權樹立を目的とした流血クーデターに突入したわけである。クーデターは 成功裡に あっけなく終結した。7月26日ファルーク王は 生後わずか6ヵ月の王子を腕に抱く王妃ナリマンと共に ようやく暮れなずむエジプトの地をはなれ 愛用のヨット「マハルサ」号をかって 再び故国の土を踏まぬ青い地中海へと旅立っていった。ヨットの船出と共に天にとどろいた21発の砲声が 去り行く王へのはなむけであったか あるいは エジプトの新しい夜明けを祝うものであったが 私には判らない。(第7図)

クーデターの最高指揮者ナギブ将軍が初代の革新政權首相の座につき 翌年エジプトは共和国を宣言した。1954年ナセルが ナギブ将軍に代って首相の座につき 英軍のエジプトからの撤退を取りつけた。1956年 ナセルは 初代大統領に就任し アラブ諸国の指導者として 大きく第一歩を踏み出した。ナセル36歳の秋 11月のことである。

シナイ戦争

パレスチナ戦争休戦条約調印後およそ6年を経た1955年 解放された国民の喜びの音が巷にあふれアラブ連合は ナセルを首相とする革新政權の下で「イスラエル国家の創造はわれわれの時代のもっとも重要な事件の一つである。いや われわれの文明の歴史における最も重要かつ重大な そして最も崇高な事件の一つなのである」とその旅行記に述べたフランスの名優ジャン・ルイ・パロオの見方とは全く逆に あくまでもイスラエルの存在を否定し 攻撃の準備を進めつつあった。そして

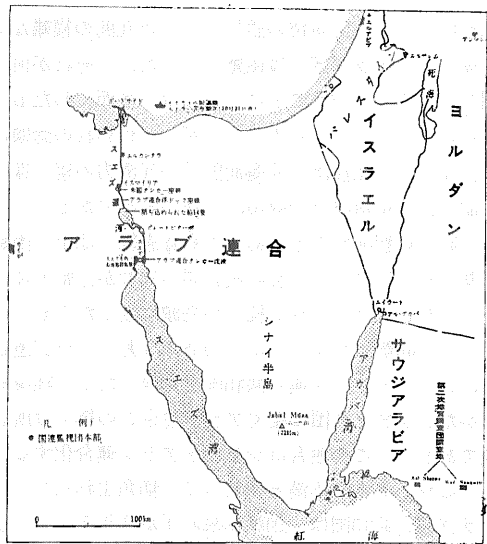


第7図 カイロの革命広場

それはイスラエルの存在をあくまで否定するアラブ諸国の共調を呼び イスラエルを取巻くアラブ連合 ヨルダン シリアからのイスラエルに対するフェダーイン（特攻隊）によるテロ行為は日増しに激化し イスラエルとの国境に近いアラブ連合の要衝ガザ地区（第8図）を根拠にしたテロ行為だけでも イスラエル側に 9ヵ月間に150名余りの死傷者を出させた。パレスチナ戦争で大敗を喫し 多量の軍需物資を失ったアラブ連合が 国内の混乱を収めて間もないこの頃 なぜにこのようなテロ行為の激化を計ったのだろうか。テロ行為の激化はアラブとイスラエルに関する限りにおいては全面戦争の到来の可能性を含み 相手国に勝る軍事力の上に立つ確実な勝利の見通しによって行なわれがちである。アラブ連合によるテロ行為の活発化は とりもなおさず ナセルの座が安泰し そして 彼の対イスラエル戦への意識的行動の現われに他ならなかった。ナセルの脳裏には アラブ共同の敵イスラエルを滅亡に追いやり 真のアラブの指導者として君臨する近い将来の自分の姿が浮んでいたことであろう。ナセルの強力な立場とテロ行為を支えていた軍事力の秘密 それは 1955年 チェコスロバキアから多量の最新兵器を入手したアラブ連合のイスラエルに対する 軍備の優越さ以外の何ものでもなかった。

イスラエルは この軍事力の増強をすばやくキャッチし。これが再びイスラエルに対する進攻を目的としたものと判断し 緊張の度を加えていった。テロ行為の激化が始って後およそ1年 1956年10月 アラブ連合とイスラエルは シナイ半島において再び戦を交え ここにシナイ戦争の勃発をみた。軍事力を誇るアラブ連合と旧式の武器を手にしたイスラエルとのこの戦の結果はどうであったろうか。戦闘わずかに5ヵ月半 またしてもアラブ連合敗北の中に この戦の幕はおりた。この戦争の終結に際しては 国連および各国の複雑な介入があり 舞台裏での暗躍は目に余るものがあった。しかしここでは私たちはこの戦に勝利を得た イスラエルが アカバ湾の自由航行権 テロ行為の全面中止 アラブ連合・ヨルダン・シリア等による脅威の完全除去を得て 中東におけるその存在位置を高め 国民すべてが 戦士として 自国防衛に当たったことを認識すればよい。

この頃まで サウジアラビアは アラブ連合およびシリアなどと友好関係を保っていたが 昔からサウド家と対立してきたハ



第8図 シナイ半島要図

シム家出身の王によって治められていたヨルダンおよびイラクとは やはり相容れぬ立場にあった。しかしそれから1年の後 サウジアラビアは ヨルダンおよびイラクと密接な友好関係を結び 反面 アラブ連合およびシリアから次第に離れていった。イスラエル追放とパレスチナ奪回を国策の一つとしたサウジアラビアと同じ目的をもつアラブ連合・シリアとの対立 そこに 私たちはアラブ諸国の危機感を伴う動揺をかもし出すアラブ特有の先天的思考性と行動とをうかがい知ることが出来る(第9図)。

シナイ戦争後のアラブ諸国

イスラエルとの再度の戦に敗れたアラブ諸国は イスラエルに対するアラブ諸国の一層の団結を計り アラブ首脳会議を開催することに同意した。しかし アラブ



第9図 タブークの町 この町はヨルダンとの国境から約240km はなれたサウジアラビア最北端の軍事基地である

諸国それぞれの内部事情の差異による相互間の複雑な関係が続発し アラブ統一は困難であった。それが何に基因しているかということについては 多面にわたるいろいろの考え方ができるのであるが われわれの念頭にまず浮ぶのは 産油国と非産油国との経済力の差 保守(王制)派と革新派との政治的思想の差異である。しかし 同じ革新陣営の中にあっても意志統一は中々困難であり そこにアラブ特有の民族間の異和が浮彫りにされる。たとえば アラブ統一の先頭に立ったナセルの呼びかけに同調したシリアは 1958年3月 アラブ連合と共にシリア・アラブ連合共和国を創設したが 経済的に豊かなシリアと貧困に喘ぐアラブ連合との統一は所詮無理であり 「この連合はシリアをアラブ連合化する」と解するシリア人の不満と相俟って 切角生れたシリア・アラブ連合共和国は 創設以来わずか3年7ヵ月の後 1961年10月に分裂した。また アラブ連合 シリアイラクは誓を共にして国旗を制定したものの 1ヵ月後には分裂し 現在なおこれら3国が同じ図柄の国旗を使用するという珍しい現象さえ生れた。

革新陣営の中に断続して起こるこのような集合離散の現象は 多分 国内においては貧困からの脱出を計り 対外的にはより豊かな国と軍事力をバックにして 革新陣営の勢力の増大とその頭領としての磐石の地位を築こうとするナセルの政策と アラブ連合との連合による損益計算の現実とに則して 政策転換を計る国の方針との不一致によって起こるのであろう。まして保守派と革新派との統一が イスラエルを共同の敵とすること以外困難なことはいうまでもない。そしてこのようなアラブ諸国の統一のむずかしさが ひいては 1967年6月に勃発した中東戦争において 三度 アラブがイスラエルに敗れる要因となったのであるが 保守派と革新派との対立をより一層激化させたのはイエーメン問題であらう。

シナイ戦争のほとぼりがようやくさめた1957年以後 サウジアラビアは それまで対立関係にあった旧敵ヨルダンおよびイラクとの友好関係への道をたどった。その政策転換のもっとも大きな理由は 時のサウド王が革命児ナセルが 反王制・親共反西欧の根本理念に立脚していることが明瞭になったことに対する王制国家としての脅威を感じたこと および石油の輸出をアラブナショナリズムという大義名分の道具・糧として革新派の台頭を目的としていると判断したからである。こうして保守派を代表するサウジアラビアと革新派を代表するアラブ連合との仲は次第に悪化し ついにはイエーメン問題を媒体として険悪な状態へと陥っていった。

世界で一番神秘的な国といわれていたイエーメンは 国土の $\frac{2}{3}$ を2000~2600mの高原によって占められ 雨量も多く 古代文明発祥地の一つとして知られ 紀元前10世紀に奴隸制国家として誕生した。降雨量は年間1000mmを越え 土壌の肥沃なこの国は アラビア半島では確かに最高の楽園であったにちがいない。しかしこの楽園は その後サラセン帝国およびオスマントルコの権力に屈し 自治権が認められたのは1911年のことである。

しかし けんらんたる過去をもつこの国も 10世紀以上にわたって領国政策をとったハミーデイン家の専政のために アラブ諸国の中でも もっとも文化の遅れた国と化し 世人から忘れられた存在となったが 1962年9月 サラール大佐の率いる軍隊による流血クーデター以後 世界の耳目を集める国の一つとして再びこの世にクローズアップされたわけである。このクーデターによって 革命派は 即位後10日もたたぬモハメット王を追放し イエーメン・アラブ共和国を樹立した。しかし難を脱れた王に忠誠を誓う者も多く 彼等は 王の統率の下に 山岳地帯を根拠にして 革命派に対する徹底的抗戦を表明し この神秘に閉ざされた国は 王統派と革命派との修羅場と化し 志を同じくしてイスラエルに対抗することを誓ったアラブ諸国は これら両派の勢力争を軸として 相離反する道をたどることになった。イエーメン革命は 一応 成功したが 王統派が健在であるかぎり革命政権の完全な安定はありえなかった。そしてついに革命政権援助のためのアラブ連合軍の派遣 いかえれば 外国軍隊の介入という険悪な事態をひき起こすに至ったのである。

革命政権の完全樹立は イエーメンの場合 明らかに王統派の潰滅を意味し このことは ひいては この国と境を接するサウジアラビアへの革新勢力の侵透の大きな可能性を示す。そのため 革新派の存在を否定するサウジアラビアは王統派の懇請もあってその援助にふみきったわけであるが サウジアラビアの王統派援助とアラブ連合の革命派援助との間には大きな相違があることに注目しなければならない。それはサウジアラビアが派兵せず 物質的援助にとどまったのに反して アラブ連合が武器弾薬はもちろん7万の軍隊を直接戦の場に送ったという歴然たる事実である。そしてアラブ連合は革命派援助によって 一層の経済悪化を招き ナセルは外国からの援助による武器弾薬をその兵と共に 対イスラエルに使用せず同胞でもあるアラブ殺傷のために使用しているというアラブ諸国の批判を招き その政策を強力にすすめるのに反比例して自己の立場を苦しくしていく道をたどっていった。

何時果てるとも知れないイエーメンの内戦は サウジアラビアおよびアラブ連合にとってはもちろん アラブ諸国にとっては大きな損失であり ひいては イスラエルに対するアラブの勢力の弱化を招くおそれが十分にあった。

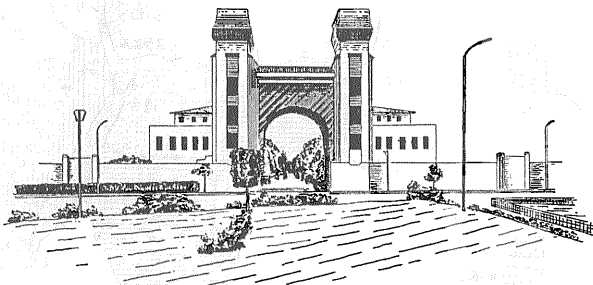
苦境に立ったナセルは 1965年夏 サウジアラビアを訪れ ジェッダの王宮（第10図）でファイサル国王に会って イエーメン問題に関して発生した混乱について深く語り クーデター発生後3年を経て 王統派と革命派との休戦を決定するジェッダ協定の調印に成功した。ナセルが滞在した1週間両者が親しく語り合った王宮の広間は豪華なシャンデリアの光に映え この協定の調印を祝福するかのよう に ジャスミンの甘い香りをふくんだそよ風が夜空に浮ぶ王宮をつつんでいたが 市内は過剰した停電のために まるでこの協定の将来に不吉な影を投げかけるかのよう に 暗黒の中に息づいていた。

イエーメン問題を媒体とするアラブ諸国の分裂は 過去3回のアラブ首脳会議とこのジェッダ協定によって解消されるかに見えたが 問題はそう簡単には片づかなかった。イエーメン問題のような事変後の処理は 相対立した2派が健在である場合には とくに戦後処理を担当する政権樹立を中心として きわめて困難である。

ジェッダ協定は

- 1) 即時休戦と休戦監視委の設置
- 2) 1966年9月までにアラブ連合軍の完全撤退
- 3) サウジアラビアの王統派に対する軍事援助の完全即時停止
- 4) 1966年11月23日までに国民投票による新政府の樹立
- 5) 1966年11月にイエーメンの各層を代表する50名による国民投票実施の方法・時期および国民投票実施に至るまでの間の統一暫定政権の設定

等の決定を目的として調印された。イエーメン国民に真の平和をもたらす新政府の樹立は双方が願うところではあったが 暫定政権の設定について サウジアラビアと王統派は両派からの人選を主張し アラブ連合と革命派は革命派だけによる政権の担当を主張して 双方ゆずらず 切角のジェッダ協定も調印後およそ2カ月を経て白紙同然となり イエーメンでは 再び 戦の火ぶたが切って落された。アラブ諸国の再度の分裂は これを一つの機会として表面化した が これ以前すでに潜在していた。 「アラブ難民のパレスチナ帰還と1947年の国連分割決議の実行を条件にイスラエルを承認しよう」というアラブとイスラエルの共存論を提唱したチュニジアのブルギバ大統領に対する非難 および世界中の回教国の首脳会議の開催を呼びかけたファイサル王に対する



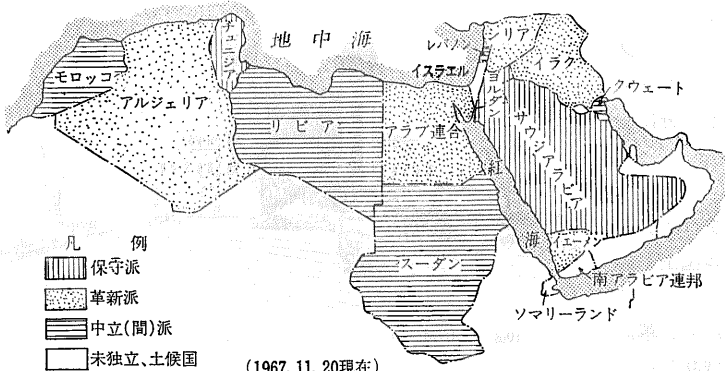
第10図 Jeddah の王宮の正面ゲイト

革新派の非難である。ファイサル王のこのような呼びかけは 回教国の一層の提携を招来するものと思われるのであるが アラブ連合を主とする革新派によっては 帝国主義者との結託を目的とした陰謀であるととられたわけである。

戦えども攻めれども完全な勝利を得るに至らない革命軍とアラブ連合軍を向うにまわして王統派の軍隊は フランス貴族の出と称するブルース・コンデ参謀長の指揮の下に神出鬼没の巧妙な作戦を展開し日を増すにつれてアラブ連合軍と革命軍の損失は増大していった。不安定な革命政権援助のために軍事援助を停止することが困難なアラブ連合にとっては この戦は一つの大きな誤算であり 経済事情悪化の大きな原因となった。一方 ナセルの立場はサウジアラビア領土爆撃に対する当該国の非難および毒ガス使用事件に対する1967年1月31日のイギリスの非難等によって 対外的には苦境に陥入っていった。そしてアラブ連合およびイエーメン革命政権は 1967年2月に相次いで起こったチュニジアおよびヨルダンの共和政権承認撤回によって 一層不安をかきたてられたわけである。

1966年7月22日 ナセルは 革命14周年を祝う演説の中で 「反動派諸国は アラブ首脳会議を 革新派諸国に敵対するために利用している」と述べてサウジアラビアを中心とする保守派をはげしく非難するとともに 9月に予定されている第4回アラブ首脳会議の開催の無期延期を各国に要請した。7月31日 サウジアラビアはこの非難に対して 「もし 第4回アラブ首脳会議が開催されないならば サウジアラビアは 首脳会議およびその関連機関への出席を拒否し 一切の分担金支払を停止する」と表明した。

そしてアラブ諸国は 中立を保つクウェート・レバノン・スーダン・リビア・モロッコ サウジアラビア・ヨルダン・チュニジア等の保守派およびアラブ連合・シリ

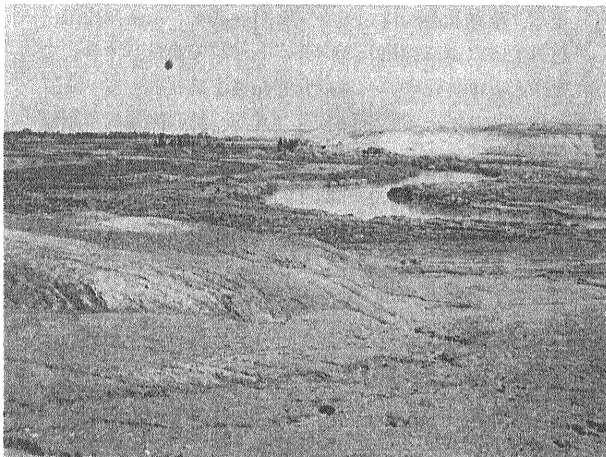


第11図 アラブ諸国勢力分布図

ア・イラク・アルジェリア・イエーメン（共和派）等の革新派に分離し（第11図）1954年5月以降「現在のアラブ連盟はアラブ連合の政策に奉仕する機関にすぎない」としてこれをボイコットしてきたチュジュニアと「過去3回行なわれた首脳会議においてサウジアラビアが行なったすべての約束を凍結することに決定した」むねアラブ連盟に正式に通告したサウジアラビアの強硬な態度によって大きな危機を迎えた。サウジアラビアが首脳会議において約束した項目の中には

- 1) イスラエルの水利利用妨害のためのヨルダン川の分流計画の分担
- 2) アラブ連合軍創設計画
- 3) パレスチナ解放軍創設維持費の分担等

アラブ諸国の安泰に直接影響をもつ事項が入っていたため サウジアラビアのこのような政策決定は アラブ諸国に 大きな波紋を与えた（第12図）。もし 第4回アラブ首脳会議が 9月に 予定通りに開催され 各首脳が過去の恩讐を越えて お互の立場を理解し アラブ諸国の真の平和とイスラエルに対する万全の樹立のために メンツをいさぎよく捨てて 心ゆくまで話し合っ



第12図 ヨルダン川 ジェリコの南方15km付近

ていたならば 中東戦争における三度の惨敗をみずにすんだかもしれない。

シナイ戦争後も ヨルダン川に生活の多くを依存している国—シリア・ヨルダン・イスラエル—相互間に時折衝突が起こったが これとは別にアラブとイスラエルとの宿縁の争も後を絶たなかった。とくに1966年7月以降シリアとイスラエルの衝突ははげしさを増し 国連安保理事会の席上におけるはげしい相互批判へと発展した。

7月25日 シリア代表は ヨルダン川分流計画施設に対するイスラエル空軍の爆撃を激しく非難し イスラエル代表は この非難に対して この爆撃はシリアの度重なるイスラエル領侵入と破壊行為による戦争誘発行為に対する 警告措置であると応酬し 同28日のシリア・イスラエル問題討議の席上において シリアのトメー大使は「イスラエルはナイルからユーフラテスまでの中東全域を支配しようとしており 核兵器を造る日も遠くない。イスラエルのシオニズムこそ帝国主義侵略政策だ」とイスラエルを攻撃した。このトメー大使の発言は 三度敗者の位置に立たされたアラブの 戦に敗れたことのくやしさと勝者に対する憎しみ およびアラブの教育政策の貧困さを卒直に物語っているように思われる(第1表)。

アデン紛争

第2次世界大戦後 エジプトにおける革新政権樹立を機に 因習に包まれた封建色の濃いアラビア半島にも 民族主義の波がはげしい勢で押寄せ その高波はイエーメン革命をこの半島の一角に打上げた。最新武器を手にした革命軍と強力なアラブ連合軍の前に王統派は後退の一步をだとり その高波がアラビア半島南端に位置するイギリスの要衝アデンに打寄せるのは時間の問題とみられるに至った。アデンは 紅海の南端に位置し 紅海側有数の良港をもっているため 1839年 これに目をつけたイギリスの支配下に入れられ 1937年には スエズ運河以東の軍事基地建設を目的とした イギリスの直轄植民地になった。以来およそ25年間 面積わずか194km²にすぎないアデンの原地人は 古い大英帝国の権力をかさにきた英軍のきびしい監視と統制の下に 諦めの生活を送ってはいたが 1962年に起こった隣国イエーメンの革命を機に 自主独立につづく民族運動の道をたどりはじめた。そうした折 因習の中によく芽生えたアデンの革新勢力侵透の阻止とアラビア半島におけるイギリスの威信の維持とを目的として イギリスは1963

年早々 アデンとその東部においてアラビア海に面する保護領とを一括して 面積約15万6千km²、人口約92万の南アラビア連邦を結成した。

しかし 早期独立と革新政権樹立への途についた民族主義者たちは イギリスの意のままに行動する封建的特権階級打倒をめざして テロ行為を展開するに至った。民族主義者団体対イギリスの争いという時点では 確かにこの闘争の展開はきわめて順調であったが その後 前者が 占領下南イエメン解放戦線(FLOSY)とより急進的な民族解放戦線(NLF)との2団体に分立するにおよんで アデン紛争は複雑化した。民族主義者団体の活動が活発となり より広くより深く浸透するにつれてFLOSY と NLF の意見の対立が表面化し 1966年4月4日 FLOSY のリーダーの一人ハイデル・シャムセルがNLF 派に射殺されるという事件にまで発展した。1967年春 アデン市内では午前10時から正午までと午後5時から7時まで毎日テロ行為が行なわれ イギリスと民族主義団体との間には危機をはらんだ対立がつついたが この紛争も 民族主義勢力を承認したイギリスの大きな政策転換によって 急転直下 終結を迎えることになった。封建勢力を中心とする親英政権による南アラビア連邦独立による勢力の存続を目的とする事態收拾を計ったイギリスの政策は水泡に帰し アデンは 革新政権による 輝やかなしい独立の日を迎えることになるのであるが 独立を目前にして 「生みの苦しみ」とでもいうのであろうか 革新勢力同志による争いによって 次第に泥沼へと落入っていく。

革新勢力抬頭当時 アデンには NLF と 労働組合を主とする「占領下南部解放機関」(OLO)との2派があったがこれらは 1966年初頭に統合されて FLOSY が結成された。しかし テロ行為を至上作戦とするNLF は アラブ連合一辺倒のFLOSY の方針に反発し 自主闘争を目的として FLOSY と袂を分ち 新生NLFとして復活した。イギリスの後退による南アラビア連邦政府の事実上の消滅によって 共通の敵を失った革新勢力2派は かつては志を同じくして行動を共にしたにもかかわらず 流血対決への道を歩く。その底流に イギリスのNLF への交渉の呼びかけ 外部の革新派の存在とその支援等が存在することは間違いない。1967年6月 中東戦争においてアラブ連合が惨敗を喫して後 アラブ連合のFLOSY に対する支援は急速に弱まり これを根本理由として アデンにおける革新勢力は NLF 中心に移行した。しかし 少なくとも現時点では NLF がアデンを完全掌握するまでに至っていない。このこ

第1表 中東諸国の教育状況一覧(1960)

	15~19才で学校教育を受けている者の割合(%)	10万人当りの高等教育を受けている者の数(人)
1 イスラエル	36	700
2 ヨルダン	35	?
3 レバノン	28	345
4 イラク	21	173
5 アラブ連合	19	399
6 チュニジア	18	64
7 シリア	17	223
8 クウェート	13	399
9 アルジェリア	10	70
10 リビア	10	49
11 モロッコ	7	40
12 スーダン	5	34
13 サウジアラビア	2	6
イエメン	?	?
日本	95	750

1963年度の国連資料による

とは NLF による政権樹立の困難さを示すと共に 未だ NLF と FLOSY との武力対決の場が残されていることを示す。しかし 中東戦争後のナセルの政策転換に基因する FLOSY の活動の純化は FLOSY に NLF との対決の不利さを痛感させ これとの戦に完全勝利を得ることの困難さを悟らせ 革新勢力の協同団結の必要性を NLF に対して呼びかけさせることになり 流血に明け暮れる南アラビア連邦にもようやく和らぐ平和ムードの曙光がみえはじめた。

イギリスの後退による封建的勢力の弱体化は新生南アラビア連邦の建設には不可欠のことであるが 革新政権の完全樹立は封建勢力の完全崩壊を前提としなければならない。かつては エメラルドの海に囲まれたこの地に権力を誇った封建勢力は 確かにその力を大幅に弱められはしたが 消滅せず FLO と FLOSY との和らぐ平和ムードの間隙について 再び活発な動きを見せている。そして1967年11月には 死者300人、逮捕者3000人の殺りくの場を生んだ。

古い伝統に生きてきたイギリスは その植民地政策の記録の上に南アラビア問題処理について 大きな汚点を残した。イギリスが ロードシアにおける失敗と全く同様の失敗を南アラビアにおいて繰返した理由は何であったらうか。イギリスの有力紙オブザーバーは「ソ連やアラブ連合など外側からの脅威に対する最強の解毒剤が 実は地元の民族主義感情と真の独立であることを理解しなかった結果である」と述べている。もちろん イギリスがそのような政策を実行しなかったということ

ではなく、先に述べたように、その政策の実行の時機が余りにも遅きに失したということであろう。これも、変転きわまりない現代の世の中で、過去の大英帝国の栄光と威信を頼みがちなイギリスの政策の現われであろうか。

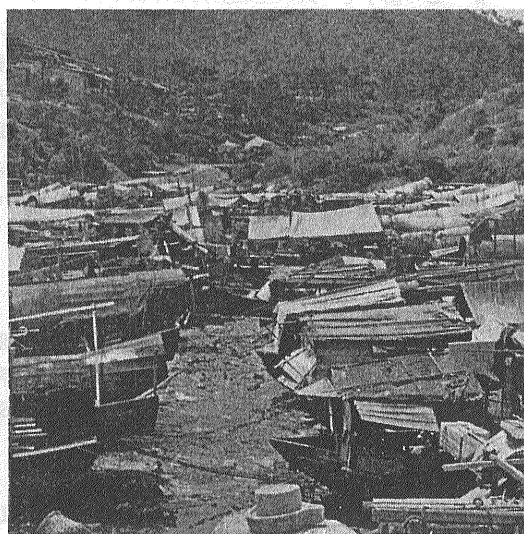
イギリスがアジア地域に進出して久しい。しかし、東・西両陣営の対立激化に伴う防衛費の支出の増額は、経済危機に直面するイギリスに、アジア地域からの軍の撤退を余儀なくさせることになった。当然か偶然か、アデンからの撤退表明と時を相前後して発表された国防白書によれば、イギリスは、1970年代中期までにホンコンを除く極東地域からの軍事力撤退を実行するという。この計画の実行による軍事費の軽減は、約2000億円といわれ、多分、経済危機に直面しているイギリスにとっては、経済好転に大いに役立つであろう。しかし、極東および中東さらにはアフリカからの撤退開始後、および撤退後に当然発生する政治・軍事局面の転換・展開についてイギリスはその政策プランの上にもどのように画いているのだろうか。1968年9月9日、アフリカ唯一のイ

ギリスの保護領スワジランドが独立し、アフリカにおけるイギリスの勢力は消滅する。1970年代後半には、ホンコンを除いて、アフリカ・中東・アジアからのイギリスの威信も消滅する。最後に残る東洋の真珠ホンコン（第13図）現在でさえ反英闘争が白昼堂々で行なわれているホンコンが、極東におけるイギリスの唯一の據点として永久に息づくことが、経済危機に基因する軍事力の大胆な引揚げに踏切ったイギリスの政策の中に、どの程度の確信の上にも立って焼付けられているのだろうか。

ホンコンは、イギリスにとつてきわめて経済的価値の高い極東における據点ではあるが、それ以上に、原地の人々にとっては、真の故郷であり、経済的據点である。イギリスは、唯軍の撤退ということだけではなく、その殖民地政策について、先に述べたオプザーバーの論評に深く耳を傾ける必要があるのではなからうか。ひとりイギリスにとどまらず、人類の平和を護り、現在の世の中では植民地が存在すること自体が疑問に思えるのだが、
(つづく) (筆者は核原料資源課)



第13図 a. ビクトリアピークから見たホンコン（香港）対岸は九龍



第13図 b. 香港の水上生活者の舟

新刊紹介

グリーン・タフ（緑色凝灰岩）
理学博士 大澤 櫻著

グリーン・タフの研究が本格的に行なわれ出したのは昭和25年以後であって、とくに数年前に秋田県の北部で黒鉄々床が発見されて以来、急速にデータが増加してきた。著者は昭和25年以来現在まで20年近く、グリーン・タフ地域の地質調査研究に従事してきたベテランである。本書では、昭和25年以後昭和41年までのおもな調査研究論文をたとえ著者と意見をことにする学説であっても、客観的に

紹介している。したがって本書をよめば、昭和41年までのグリーン・タフの研究論文のダイジストをしることができる。この種の科学の紹介書には、しばしば、自分の学説を強調する余り、意見をことにする学説を省略するか、もしくはごく簡単にふれていることがあるが、本書ではそのようなことがない。この点、本書は原著論文をみる機会の少ない地方の人とか、現場の仕事に従事しつづる多忙な人などには、とくに、便利である。地学関係の方はぜひ1冊座右に置いておかれることをおすすめする。

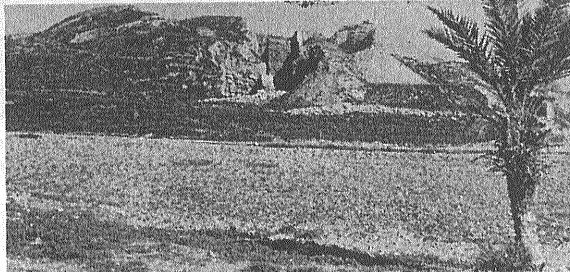
グリーン・タフ新書版型 本文233頁 定価480円
発行ラティス社 発売 丸善株式会社



第14図
ヨルダン断層谷の一部死海北方20km 付近の風景キリストが洗札を受けた場所はこれから少し上流へ行ったところにある



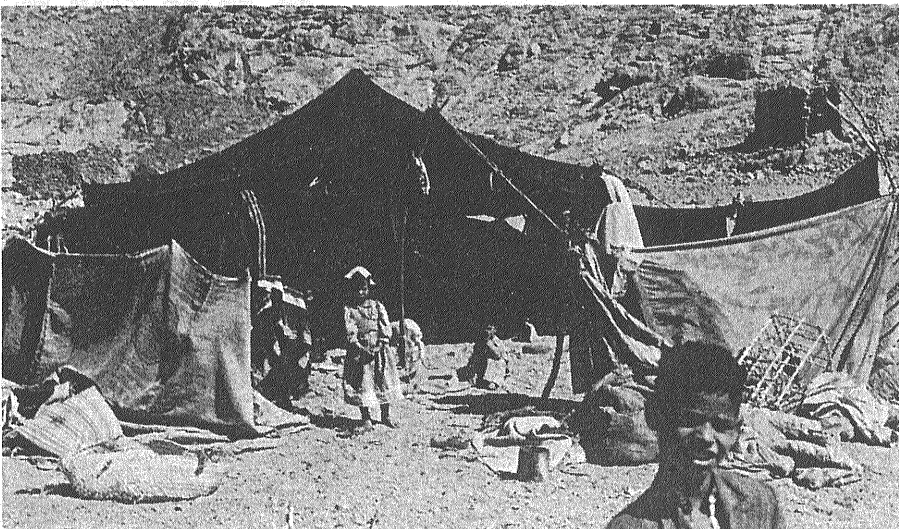
第15図
死海湖畔の休息所 アラブの土地には珍しいLIDO（屋外水泳プール）とシャレタ看板が立っている



第16図 死海の北端部
水面の高さは海水準下394m
建物はホテル 水辺には介殻が右に混っており 塩分38.8%のこの湖にも生物がいることを示している

ヨルダン断層谷のもっとも低い部分にあり
もっとも深い部分は399mある 左端の

第17図 Jelico 郊外にある7000年前の遺跡の発掘の跡 現在はアラブ難民収容地内の一角にあり立入ることはできない



第18図
エルサレム郊外のベドウィン（遊放民）のテント 中央に立っている子供の左側はアバヤを着た女性